

『友人T②』

✱

「鈴鹿、初めてか？」

僕は、肯いた。

「すまなかったなあ。見舞いに行けなくて」

Tは両手を広げて僕を迎えてくれた。

「ウェルカムトウスズカ。それで、おかえり」

「ただいま」

何年かぶりにTと熱い抱擁を交わした。

僕たちは近くにあったベンチへ向かった。腰掛ける寸前のところで二人とも身体を静止させて空気椅子のような形を取った。どちらかが促したわけでもなく完全に自然の成り行きだった。

僕の肉体は、『これこれ』と懐かしい感情が溢れ出してくるのを掴み取っていた。

Tと時間を共にすると、すべてが真新しく見えるんだ。

「この前、ドイツGPのときに大自然に行ったんや。アイフェル国立公園。知ってる？」

「知らない」

「大自然……たまらんかったなあ」

「マイナスイオンあった？」

「目に見えるくらいあったで」

「何色やった？」

「青と白」

「マイナスイオンって目に見えるん？」

「見えるで」

「じゃあ、プラスイオンはあった？」

「あったよ。優雅に駆け回ったわ」

「何色やった？」

「黒色」

「プラスイオンなんて存在するん？」

「存在するよ。昔、日本でよく行ってた動物園のゴリラの名前がプサイオンやったわ」
「日本の動物園のゴリラの名前って大体、よしことかひろしとか和名が多いんちゃうの？」

「やっぱり君は鋭いなあ……せやねん。和名が多いねん。よく知ってたなあ」
「皆、知ってるやろ」

「日本の動物園のゴリライコール和名っていう方程式は成り立つよな」
「やったらプサイオンはおかしいやろ」

「でも、俺がよく行ってた動物園にはゴリラが三頭おったんやけどな？　そこにいた三頭のゴリラの名前が、よしこ。ひろし。そんで、プサイオンやってん」

「なんで三頭目だけ横文字やねん」

「日本に新しい風を入れたかったんちゃうか？」

「それやったらもっと違う方法があったはずやろ」

「いやあ、ここしかないやろ」

「ゴリラにプサイオンって命名することが？」

「世界の歴史を塗り替える」

「んなわけあるかいな」

僕らのやり取りをずっと眺めていた老人の入れ歯が地面に落ちた。
老人の姿を見て味を占めたTが終わらせに掛かった。

「そんなことより足がプルプルしてるんやけど、なんで？」

「空気椅子してるからやんか」

「てっきりプサイオン浴びたからやと思ってたわ」

「プサイオンの効果って人体にとってはマイナスなん？」

「皆さん、日本の動物園に行くときは気を付けて下さいね」

「それはゴリラの方やろ。もうええわっ」

老人は拍手をしてから、

地面に落ちている入れ歯を拾い、

装着して、去っていった。

久しぶりの再会で胸が高まっていたのと、徐々に当時の感覚が蘇ってきたのと、Tが相変わらず輝いて見えたのとで、僕の脳裏には彼に聞きたいことが山ほど浮かび上がった。
僕

僕の想いをすべて見透かしているかのように、Tが口を開いた。

「新之助^{しんのすけ}さんは分かってくれてるから大丈夫や」

懐かしさに押し潰されそうな気分に陥った僕の目頭が熱くなっていくのを感じ取る。

「じゃあ松田^{まつだ}さんは？」

「分かってくれてる。ミハエルさんも分かってくれてるよ」

「ミハエルさん？」

熱くなった目頭が冷めて、頭上に疑問が浮かんた。

あれ、イワシ師匠じゃないの？

「ミハエル・シューマツソさんや」

僕は、彼がF1の世界にどっぷり浸かっていることを真に受けた。

「ミハエルさんってそんなに凄い人なん？」

「ものごつつ凄い人やで」

「イワシ師匠よりも？」

「それは、比べられることじゃないなあ」

Tは少し考えてから言った。

「もちろん両方とも凄い人やで。でも、判断基準が違うから比較はできない」

僕が眠っていた三年間とTが起きていた三年間。

その差を大きく感じた瞬間だった。

「F1界の凄いとお笑い界の凄いは別物やからなあ。でも、どちらの世界も人間として凄くないと輝けへんやろなあ」

Tは、僕との距離を測るように言った。

「この前、ミハエルさんに言われてん。『今、眺めている景色を自分の努力で掴み取ったかどうかが重要だ。先輩や恋人や両親が導いてくれてる景色を、自分の力で眺めていると思ひ込むのは危険だ。それは、肉体に根拠のない自信だけを蓄積することになるだろうから』って。あの時に味わったプラスイオンの匂いは一生忘れられへんやろうな」

僕は、何も答えることが出来なかった。

Tは、『早く突っ込んでくれよ!』とは言わなかった。

何もしなかった人間の三年間と、掲げた目標に向けて努力した人間の三年間とは、同じ三年間でも価値が違う。

頭のなかで文字列をなぞった瞬間、Tとの記憶がひと回り小さくなったような気がした。

再会せずに思い出を思い出のまま仕舞い込んでいた方が良かったのではないか。あの頃のTと僕だったからこそそのグルーヴだったのではないか……。

彼は遠くへ行ってしまった。

僕の肉体には沈黙の秒数だけ、後ろめたさが蓄積されていく。

一刻も早くこの場所から逃げ出したいようになってしまった。

再会を待ち望んでいたはずなのに、彼は輝きすぎていた。

今の僕には眩しすぎて、肩を並べる自信がない。

「新之助さんは全部分かってくれてる」

と、Tが言った。

僕は、何も答えられなかった。

五秒くらいの沈黙を経てから又、Tが言った。

「松田さんも浜本はまもとさんもイワシ師匠も分かってくれてるよ」

面白いと思うことも、Tに、『凄いなあ』と思って貰える言葉も現れなかった。浮かんでくるのは、今まで抱いた醜い記憶ばかりだった。

「そんで何より、俺が一番分かってるよ」

と言ったTは僕の肩に手を伸ばした。

「噂によると、眠り続けていた間に大きなオナラこいて皆を喜ばせたらしいやん？」

僕は、肩の上に乗るTの温かい手の感触を味わいながら答えた。

「自覚はないけどね」

「なあ、一つだけ言うとか。俺はオナラで人を幸せにすることは出来ない。でも、明日の日本GPで優勝することはできる。君は明日の日本GPで優勝することは出来ない。でも、オナラで人を幸せにすることはできる。事実として、君はオナラで人を幸せにした」

励まそうとしてくれているTの言葉が、鋭利な刃物に見えて仕方がなかった。

「生まれ落ちた人間はそれぞれ求められている役割が違う。各々が自分の役割を見つけ出して自分自身を誇りに思えたらそれだけでええんちゃうか？ 自分の足で立てていればそれだけでええんちゃうか？ たとえ、三年間眠り続けようが、三年間でF1レーサーになろうが、そこに大した違いはない気がするんや。君は、三年間眠り続けたことをネガティブに捉えている。でも、俺は君が三年間この世界から離れていたことを羨ましく思う。これは、望んで出来ることじゃない。ネガティブに捉える理由が俺には見当たらない。でも、もし理由があるとするのなら……その方が楽やからやろなあ」

僕は、Tの言葉に衝撃を受けた。

「真実と向き合うのなんて自問自答しているときだけで良いんや。誰かと一緒にいるときなんてフェイクばかりなんやから真実なんて求められるわけないねん。フェイクの中で真実を押し付けるのは、相手からすればただの虚偽でしかないねん。二人以上の空間は、フェイクのぶつけ合いにしたらいい。間違っても真実を求めるなよ。痛い目見るぞ」

包み込んでいたTの腕がそっと僕の肩から離れた。

「昔、君がさ、Tはお笑い芸人目指してるの？ って聞いてくれたん覚えてるか？」

「もちろん、覚えてるよ」

「お笑い芸人ってなんやと思う？ って返した俺に君はなんて言うてくれた？」

鮮明に覚えていたのに、曖昧な返事をしてしまった。

「F1レーサーになることってボケた……気がする」

「君の発言のおかげで俺は晴れてお笑い芸人になることが出来ました」

「お笑い芸人じゃないじゃん。立派なF1レーサーじゃん」

「アホやなあ。ホンマにアホや」

と、Tは言った。

「別になんだってええねん。君と俺が納得できたらこの場所はなんだってええねん。外野からやいのやいの言われようが、おこがましく世の正論を述べられようが、そんなん知ったこっちゃないねん。一般的にはそれが正解なんかもしれん。でも、この空間は俺たち二人が正解やと思ったら正解やねん」

自分の想いを扱うTの姿が美しく見えた。

僕はたまらず、『やっぱりTは、凄いなあ』と漏らしていた。

「世の中は情報で溢れかえっている。無差別に拾い上げても、ろくなことないからなあ。必要なものと必要じゃないものをしっかりと見極めて選別しないと飲み込まれて自分を見失う。俺は、君があの時、F1レーサーになること？　って言うてくれたおかげで目的地が見つかった。それから必要なものだけを選別して拾い上げ続けたら、たどり着いた。君が俺に目標を与えてくれた。何でも出来るようになってしまった世の中で人生を賭けた目標を見つけるのは至って困難だろう。やっぱりあっちの方が良かったかも……って未練を持ってしまう人間も沢山いるだろう。でも、俺は君のおかげで一度も振り返らずに突き進むことができた。余計なものは一切、拾わなかった」

一息でまくし立てたTは一呼吸おいてから言葉を聞かせた。

「だから俺は大いに感謝してるんやで」

いつの間にか、Tに対する後ろめたさが薄れていた。

自分の思い込みの激しさで、すべての景色を歪ませていたことを知った。

Tと再会したとき、僕には彼が眩しすぎるくらい輝いて見えた。

でも、それは彼が眩しかったのではなくて、僕がくすんでいただけなのかもしれない。

口が勝手に開いていた。

「明日の日本GP、思いっきり突っ込んでケガしないようにね」

「何にも難しくない直線で思いっきり壁に突っ込んだらめっちゃめっちゃボケてるように見えるかな？」

「ツツコミとボケ、同時にやらんといってもらえる？」

と、僕は言った。

「しかもその状況、壁に突っ込んでからボケてるんか、ボケてから壁に突っ込んでるん

か、いまいち判断がつかへんからもつと分かりやすくボケて貰えるかな？」

「逆走するとか？」

「それは、すべての人間に迷惑が掛かるからやめて？」

「じゃあ、君が俺の替え玉で日本GPに出るか？」

「そしたら僕は、ボケる前に壁に突っ込んでこの世の生活をやめさしてもらわなあかんとになるやんか」

「確かに……君、一回やめさしてもろてる身やもんなあ」

と、Tは今日出会った中で一番大きな笑顔を見せながら言ってくれた。

Tは僕のどんな想いも笑いに変えてくれる。

悔しい気持ちも、苛立たしい気持ちも、醜い気持ちも、何もかも……。

僕は、ニヤけながらも、彼の言葉に異議を申し立てた。

「やかましいわ！」

「ほな、もう一回やめさしてもらうか？」

「いや、この世の生活はやめさしてもらわんけど、漫才はやめさしてもらわ」

「君も言うようになったなあ」

「もうええわっ」

僕とTは、同時に言葉を漏らす。

「どうもありがとうございました」

目の前で拍手をする老人五人組の入れ歯が五つとも、地面に転がり落ちていた。